●事例●

九州大学における学生参加型学生支援の取組について

鈴本　司
（九州大学　学務部長）

一　はじめに

九州大学は、「時代の変化に応じて自律的に変革し、活力を維持し続ける開かれた大学の構築」、「それに相応しい研究・教育拠点の創造」をコンセプトに、箱崎地区、六本松地区、原町地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・桑原地区、前原市、糸島郡志摩町にまたがる地域に、伊都新キャンパスを建設中である。伊都キャンパスには、平成一七年一〇月に工学系部局が箱崎地区から移転を開始し、平成二一年四月には六本松地区から全学教育（教養教育）が移転し、一〇月には数理系の部局が移転した。

これによって、伊都キャンパスは、現在、学生・教職員等を合わせて一万二千人が集う九州大学で最大のキャンパスとなった。伊都キャンパスへの統合移転は、今後計画的に進められ、平成三一年までに完了の予定である。

このように着実に発展を続ける伊都キャンパスにおいて、現在、新入学生を対象に取り組んでいる学生参加型の学生支援について紹介したい。

二　新キャンパスでの新入学生サポート制度創設の背景

全学教育（教養教育）は、これまでは六本松キャンパス（福岡市中央区）で行われており、六本松キャンパスの歴

史は、大正一〇年の福岡高等学校の設立にまで遡る。その後、六本松キャンパスには、昭和二四年に九州大学第一分校が置かれ、昭和三〇年からは三つの分校が統合され九州大学分校となり、昭和三八年四月からは教養部となった。平成六年三月の教養部廃止後も、引き続き全学教育を所管する学内共同教育研究施設が置かれ、全学生の教養を育む場となった。

このような歴史ある六本松キャンパスから、平成二一年四月には全学教育を履修する学部一年生、二年生の約五千人が伊都キャンパスに移って勉学を開始している。なお、現在、平成二一年度入学の学部一年生の約四八％は、伊都キャンパスに近い福岡市西区に居住している。

伊都キャンパスは、山と海に囲まれた素晴らしい自然の中にあって、知の新世紀を拓く教育研究の拠点に相応しい施設・設備を備えており、学生の勉学環境として快適な状況にある。

しかしながら、伊都キャンパスに新入学生を迎えるのは平成二一年度が初めてであることや、キャンパス周辺の生活環境が若者の欲求を満たすような都会的機能や利便性が十分に整っていない状況にあることから、新しい環境に初めて直面する学生が、不慣れな大学生活に対する不安を抱くことなく、スムーズに勉学をスタートさせるためには、新たなサポート制度を構築することが急務であると考えた。

三　新入学生サポート制度

全学教育の場が伊都キャンパスに移転することが間近に迫ってくるにつれて、教職員の誰もが思案していたことは、新しいキャンパスで新入学生が戸惑うことなく大学生活に溶け込める良い方法が何かないかということであった。

これについては、全学教育を統括する高等教育開発推進センターの教員と学務部全学教育課の職員が一緒になって何度も検討を重ねた。また、対応策の原案について、全学各部局から選出の教員で構成する学生委員会においても検討を重ねた。

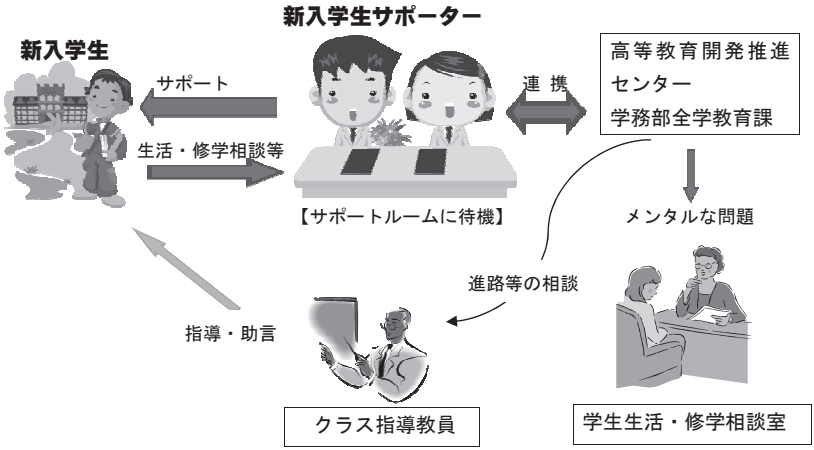
その結果、新入学生をサポートする新しい試みとして、先輩学生が中心的役割を果たす制度を構築した。

新入学生サポート制度の概要は、次のとおりである。

①優秀な学部二年次生をサポーターに採用する。

②サポートルームを設定し、昼休み時間や特定の時間帯にサポーターが待機する。

③サポーターは、新入学生の生活面や修学面に関するご



く初歩的な相談に応じる。

④サポーターには事前研修を行うとともに、定期的な連絡会を開催し、サポーターと教職員が問題点を共有する。

⑤サポートの期間は、前学期中に設定する。

サポーターを学部二年次生としたのは、全学教育が行われる伊都キャンパスセンターゾーンで活動するのは、主に一～二次生であることと、新入学生が一番相談し易いのは年齢の最も近い先輩学生であろうという狙いからである。

また、サポーターの負担度を考慮して、サポーターが相談を受ける事項については、生活面や修学面のごく初歩的な相談に限ることとした。そのほかの相談への対応については、①教務に関する事項は、全学教育課の職員が受けること、②メンタル面の問題と思われる事項は、高等教育開発推進センターの学生生活・修学相談部門の教員が受けること、③進路に関する事項は、高等教育開発推進センターの教員がまず受けて、各学部のクラス指導教員への橋渡しを行うこととし、サポーターと教職員に周知徹底した。

サポートルームでサポート活動を行う時間帯には、高等教育開発推進センターの教員又は全学教育課の職員が必ず在室するよう配慮した。

サポーターに対しては、サポート活動時間（実際にサポートを実施する時間帯及び研修時間）に応じて所定の謝金を支払うことにした。

新入生オリエンテーション当日の四月九日（木）午後一時に、サポートルームをオープンした。上の写真は、当時の様子で、オープンと同時に長蛇の列ができ、臨時の場所を設けてサポート活動に当たるほどの盛況ぶりであった。主な相談内容は、時間割の見方、履修登録とは何か、サークル活動などについてであった。

その後、日数が経過するにつれて、サポートルームを訪れる学生は徐々に減少し、連休明けの五月には来談者も落ち着いた。

新入学生サポート活動の詳細は、紙面の関係で全てを紹介できないが、今回の結果を総括すれば、次のことが言える。

①大学に入学したばかりの学生に対し、ごく初歩的なサポート活動を実施したことは、大変好評であった。

②時間の経過とともに来談者が減少したことは、今後の改善事項と思われる。

③サポーター同士で所属学部を越えた交流が拡がったことは、当初の予想以上の効果であった。

④サポーターと教職員の繋がりの拡大も予想以上であり、サポーターとなった学生を通じて、今どきの学生の考え方や要望等を聴取できたことは副次的な効果もあった。

⑤サポーター学生へのキャンパス内アルバイト提供となった。

以上のほか、このほどまとめた「新入学生サポート制度平成21年度実施報告書」に寄せられた、あるサポーターの感想の一部を紹介したい。

『……「時間割の意味がわからない」と悩むなんて、大学に入るまで想像もしていなかった。必修の講義、選択制の講義、興味を惹かれる講義。あれは必ず取らなければいけないが、これはあの学部の学生しか取れない。文系の講義を三つ取らなければならないからこのコマを変更して……。二年生になった今でも手間のかかる作業なのに、広

いキャンパスで文字通りに右も左もわからない一年生が、スムーズに時間割を組めるはずがないだろう。しかも、新入生には考えるべきことがまだまだある。友達をどう増やすか、どのサークルに入るか、バイトはいつからどこで始めるか。……

これらの点で、新入学生サポーターは非常に有意義な存在だったと思う。話をいただいてすぐに引き受けさせていただいたのも、「自分が一年生のときにこの制度があれば助かっただろう」と感じたからだ。一年生が抱える新しい生活への不安を、少しでも軽減できたらと思ったのだ。……縦だけではなく、横のネットワークが生まれたことも、このサポーター業務に参加してよかったと思える点のひとつだ。他学部、特に、普段あまり交流することのない理系の学部のサポーターと一緒に活動し、さまざまなことを話し合う中で、自分の現状や将来について考える機会が増えた。さらに、教員や事務の方々とも楽しくコミュニケーションをとることができた。……学生・職員間の意見交換の場にもなり、とても価値あるものだったと思う。……』

サポーターが熱心に相談に対応

四　学習サポート制度への展開について

新入学生サポートルームを通じて上がってくる相談の中には、授業内容等の履修に関することが少なからず見受けられた。また、これまでに学生生活・修学相談室に寄せられた相談の中にも、「大学の授業についていけない」、「勉強の仕方が分からない」等の相談の多さが指摘されていた。

そのため、高等教育開発推進センターの教員を中心として、新入学生サポート制度に続くものとして、「学習サポート制度」が立案された。

この制度は、優秀な大学院学生を「学習サポーター」として採用し、学部一年次生に対する学習相談に限って、後学期から試みているものである。

学習サポーターは、伊都キャンパスで勉学する工学系大学院の修士課程及び博士課程の学生で、研究活動の空き時

間にサポート業務に携われることとし、サポーター学生には、ティーチングアシスタントと同額程度の謝金を支給することにしている。

この学習サポート制度は、現在実施中であるが、サポート室を訪れた学生がリピーターとなっていたり、心の悩みを持つと思われる来談者については、学生生活・修学相談室に取り次いだりするなど、いくつかの効果が見えてきている。なお、サポートルームでサポート活動が行われる時間帯には、高等教育開発推進センターの教員又は全学教育課の職員が必ず在室するなどの配慮を行っている。

五　学生に対する経済的支援としての側面について

以上のように、伊都キャンパスでは、学生による学生支援という新たな取組を開始しているが、この取組は、アルバイト先が少ない伊都キャンパスでの経済的支援策の側面も有している。このほか、全学教育においては、今年度から、ティーチングアシスタントを定期試験の監督補助者として活用することにしている。これは、伊都キャンパス以外のキャンパスから全学教育の授業に出向く教員の負担軽減を図るとともに、学内での学生アルバイト提供の拡大策でもある。

学生参加型の学生支援の取組や教育補助業務への学生活用は、学生に対する経済支援にも有効ではないかと思っている。

六　おわりに

本学では、これまで、初年次教育あるいは導入教育と言われる取組や新入学生への支援への対応はやや立ち遅れていたと思われる。全学教育を統括する高等教育開発推進センターの教員や全学の教員並びに学生と直接触れ合う学務系の職員は、これからも連携協力を密にして、学生支援のための様々な方策について不断に検討を続けていくことが大切であると思う。

今回紹介した二つの学生参加型の学生支援の取組を契機にして、九州大学の教員、事務職員及び学生の連携協力が一層深まることによって、伊都キャンパスのみならず全てのキャンパスが更に活性化することを期待している。